

シンガポールの「サヤン」をシンガポール英語文学から探る

前田 瑞絵[†]

Exploring Singapore's "Sayan" from Singapore English literature

Mizue Maeda

1. はじめに

本論文は、多民族国家シンガポールのナショナル・アイデンティティに「Sayang(サヤン)」という感情が大きく関わる、という仮説のもとにシンガポール英語文学を通じて、「サヤン」を探り考察を試みるものである。シンガポールには、マレー語、華語、タミル語、英語の四公用語に加え、「シングリッシュ」というシンガポール生まれのクレオール英語が存在している。英語が事実上の国語として機能している同国では、文学の分野でも英語文学が盛んであるが、特徴として「シンガポール標準英語」と「シングリッシュ」の2つの英語を使い分け、「サヤン」というシンガポール人独自の感情を表現したものが多く存在することである。本来「サヤン」はマレーシア、インドネシアで英語の“Darling”, “Dear”, “Honey”, ときには「残念」という意味で使われている言葉だが、シンガポールではなぜ異なった意味で使われるようになり、固有の感情を意味するようになったのだろうか。今日多くの国で多文化共生社会のあり方が模索され、地域によってはクレオール化した英語が生まれている。移民社会から始まったシンガポールにおいて、どのようにナショナル・アイデンティティ、独自の言語と感情、文学が生まれたのかを英語文学から探ることは少なからず意義があると考えられる。シンガポールの歴史を、「文化・民族・ナショナリズムの誕生」という視点から分析し、独立後の政府のさまざまな言語・民族政策、それによって生じた民族融合とシングリッシュの誕生について探り、独立前、独立後、現在の三つの異なる世代のシンガポール英語文学の短編集を読み解くことで、「サヤン」とナショナル・アイデンティティの考察を試みることにする。

2. シンガポールの誕生と歴史的背景

2.1 シンガポールの誕生

シンガポールは、マレー半島の南端ジョホール州の南に

位置する、東西約42キロ、南北約23キロ、面積721.5キロ平方メートル（2018年）、日本の奄美大島に等しい大きさの島である。3世紀以前の歴史的記述はなく、最も古いものは3世紀の中国の文献における「半島の先端の島」という意味のプルーチンである。7世紀頃には漁村テマセックとして知られ、14世紀末にシンガプーラという名称が定着し、様々な国の船舶が寄港していた。しかし、1513年にポルトガルの徹底的な侵略を受け、現地住人の多くが虐殺され町は壊滅し、その後300年以上の間、漁民と海賊が滞在するジャングルに覆われた島になった。1819年、人口数百人の島シンガプーラにイギリス東インド会社の書記官トーマス・ラッフルズが上陸し、名称もシンガポールと改めた。1824年にはイギリスによる植民地支配が認められ、インドやオーストラリア、中国大陸などとの間での東西交易、三角貿易の中継地点として、また、マレー半島のマラヤ連邦州などで産出された天然ゴムやスズの中継港として発展する。この時期に、貿易商、行政官吏としてユーラシア人が、スズ鉱山、天然ゴムなどのプランテーションや港湾での労働者として、中国人、インド人、マレー人などの多くの移民がシンガポールへ渡来し、現在の多民族国家の起源となった。シンガポールは他の旧植民地と異なり、植民地化以前の土俗の言語、民族文化が存在していなかった。そのため土地の旧所有者ジョホール王国支配者、新所有者イギリス、アジア各地から集まってきた移民者などの三者が植民地化により利益を得られたことで、当初の関係は良好であった。

2.2 イギリス植民地時代

1873年から1930年までの40年間にシンガポールの貿易額は八倍に増え、1981年には人口は約14万人になり、住民の人口比率は中国人72.1%、マレー人16.0%、インド人8.0%、とほぼ現在の民族比率になった。アジア各地からの移民者は二段階に分かれ、第一段階の移民者は、シンガポールの植民地化と同時に近隣諸国から集まった商人たちで、マラッカの中国人、マレー半島各地のマレー人、イン

[†]2020年度修了（人文学プログラム）

ドネシアのスラベシ島南部のブギス人、中東のアラブ人などである。第二段階の移民者の大多数は、アジア各地から航行船の積荷の運搬や雑用などの仕事を求めてやって来た単純労働者で「クーリー」（苦人）と呼ばれた。時代の経過とともに、移民者は貿易商と肉体労働者に二分され貧富の差が生まれた。このように、インドや中国からの労働力を背景に、シンガポールを含むマレー半島では経済的な発展が進むが、イギリス植民地政府は住民に政治活動を許可せず、住民間では政治が不在であった。植民地時代のシンガポール社会の大きな特徴は、植民地政府が民族ごとに居住地を定めていたため、移民者たちは自分が帰属する分節社会の中で仕事や生活を営み、他民族との交流は皆無に等しく、さらに同じ民族内でも出身地、言語、宗教などにより細分化されていた点である。

20世紀に入り、シンガポールに定着する移民者が増え、植民地生まれの二世、三世が現れ、一部の住民の間では民族を超えた仲間意識が形成されていった。政治不在のシンガポールにも、徐々に住民の間で政治意識と政治行動が見られるようになり、大きく分けて3つのグループが現れてくる。第一のグループは、「愛国華僑」と呼ばれる母国の中国政治に目覚めたグループであり、シンガポールに国民党支部を作り抗日運動を組織した。第二のグループは、この地にマラヤ共産党を結成し、共産主義国家を作ろうと夢見ていた。第三のグループは、母国や民族が異なっても、同じ地に生まれた者同士であり、自分たちは移民集団ではなく植民地生まれの集団であるという意識を持ち民族を超えた仲間意識を生成し、次第に政治意識を強めていった。ただ、これら3つの集団は、生活、教育言語、政治志向が全く異なり、同じ地に暮らしていたにも関わらず、社会的な接点がなかった。

2.3 日本軍占領時代とナショナリズムの芽生え

イギリスはシンガポールを東南アジアにおける植民地拠点として要塞化していたため、1941年12月8日に太平洋戦争が始まると、1942年2月7日から山下奉文中将が率いる日本陸軍による攻撃が開始された。2週間後にイギリス極東軍司令官のアーサー・パーシバル中将は無条件降伏し、シンガポールは「昭南島（しょうなんとう）」と改名された。日本軍政下の行政組織「昭南特別市」が設置され、日本から多くの官民が送られ過酷な軍政が敷かれ、市内では憲兵隊が目を見せ、ヨーロッパ系住民は収容され、インド系・マレー系・中華系住民も泰緬鉄道建設のために強制徴用された。

日本軍占領時代は、多くのシンガポール住民に、シンガポールへの帰属意識と、ナショナリズムを持たせる機会を与えた。日本がシンガポールを攻撃したとき、住民はイギリス人が自分たちを守ってくれると信じていたが、イギリス人（民間人）だけが安全な場所に避難し、住民は置き去りにされた。また、日本軍の攻撃開始から約7日間で無条件降伏し、捕虜として日本軍に命令されているイギリス兵

士の姿を見たことで、イギリスが絶対的な存在ではないことを知った。その上、日本の統治がイギリス以上に過酷で、住民は「自分たちの生活を守ることができるのは自分たちだけである」ということに気付いたのである。

2.4 自立国家への道のり

1945年8月、第二次世界大戦が終結し日本軍は撤退した。イギリスによる植民地支配が継続されるが、住民の反感は強く、マレー半島独立の機運が高まった。当時のイギリスには、独立運動を抑え込むだけの余力はなく、諸外国からの植民地支配に対する反感も強く、植民地支配を放棄した。1947年7月、イギリス植民地当局は立法会議選挙法令を公布し、1948年3月20日、シンガポール初の選挙が実施された。1954年11月にはシンガポール人民行動党（以下「PAP」）が結成され、初代首相リー・クアンユー（以下「リー前首相」）が圧倒的な支持を得て当選を果たす。1957年にマラヤ連邦が独立し、1958年にはシンガポールに、外交と国防を除く自治権が与えられた。1959年6月、イギリスの自治領となり、1963年にマレーシア連邦を結成するが、マレー人優遇政策を採ろうとするマレーシア中央政府と、国民の平等政策を進めようとするPAPとの間で軋轢が激化した。1964年7月21日に優遇政策を求めるマレー系のデモ隊と中国系住民が衝突し、シンガポール人種暴動が発生し多くの死傷者がでた。リー前首相はマレーシア国会において「政策は全てのシンガポール国民に対し公平であるべきだ、人種、宗教による差別があってはならない」と熱弁をふるい、1965年、マレーシアはシンガポールを分離し、シンガポール共和国が誕生した。

3. 多文化主義国家としてのシンガポール

3.1 四つの民族の民族グループとエスニシティ

シンガポールでは、民族・言語・宗教などを平等に扱うように憲法で規定され、調和の観点が盛り込まれている。国民を「中華系」、「マレー系」、「インド系」、「その他」の4つの民族に分類し、国民はいずれかの民族に属することが義務付けられ、IDにも民族が明記されている。それぞれの文化・宗教などを尊重し、同時に各民族がシンガポール国民としてのアイデンティティを獲得できるように、差異化と統合のバランスを図りながら各種の施策を行っているが、各民族の内情は統一的なものではなく、それぞれの民族内には全く異なる多くの民族グループやエスニシティが混在している。

（中華系民族）シンガポール国民の4分の3を占めるマジョリティ民族であるが、福建、潮州、広東、客家、海南、閩北、福州、興化、上海など出自が異なることから、数多くの方言グループが存在している。シンガポール政府は国民の使用する中国語の方言を減らし、公用語の華語へ統合していく運動を進めている。その結果、中華系民族が各家庭で最も利用する言語については、方言を使う者の割合は

減少したが、英語の利用率が増加し、華語の利用率はあまり増加していない。中華系民族の中には、この方言に由来する民族グループもあれば、プラナカンと呼ばれる民族グループもある。プラナカンはシンガポールにおいてはエリート層を形成し、独自の協会によって一定のエスニシティを持っている。

(マレー系民族) マレーもしくはインドネシアに、出自を持つ人々のことを指す。言語的には民族全体で母語(マレー語)の利用率・識字率ともに、他の民族に比べて最も高いが、家庭内における英語の利用率は最も低い。宗教面では99%の割合でイスラム教の信仰がされており、民族内のエスニシティにも一定の均一性がみられる。

(インド系民族) インド、パキスタン、バングラディッシュ、スリランカに出自を持つ人々である。宗教に関しては、ヒンドゥ教徒が59%、イスラム教徒が22%、その他キリスト教やシーク教なども信仰しており、民族内での均一性はそれほど高くない。インド系民族の母語と設定されているタミル語話者の割合は他の民族に比べて圧倒的に低く、英語話者の割合や英語の識字率は他の民族に比べて最も高い。インド系民族はシンガポールへ移住した時代や過程もさまざままで、言語的にも文化的にも様々なアイデンティティを有している。

(その他) ユーラシアン、ヨーロッパ人、アラブ人、日本人などが含まれる。ユーラシアンとは、ヨーロッパ人と現地住民の間に生まれた混血の人々の子孫の民族グループのことであり、先祖が異なるために統一された文化を持たず、不均一な民族グループとなっているが、教会を中心に自らのエスニシティとアイデンティティが主張されている。

3.2 独立後の言語政策による教育と民族統制

多民族国家として独立を果たしたシンガポールだが、当時は国への帰属意識や国民の一体感が希薄な状態であった。各民族の文化・アイデンティティを尊重する一方で、一つの国として、民族内で異なるエスニシティを抱える民族同士を標準化するための統合・融和政策も同時に進められてきた。シンガポールは独立前の自治政府時代から、政府は「マレー語」、「華語」、「タミール語」、「英語」という四つの公用語を設定し、マレー語を国語としているが、英語を事実上の国語にしている。その理由として、多民族国家シンガポールにおいて、英語は民族的に「中立」な言語であると同時に、国際語、科学技術の言語、内外投資家の言語として、経済的発展に不可欠であること、さらに植民地時代からの公用語として、司法、立法、行政などの公的記録の連続性を保持するのに好都合である、などのことを挙げている。このように、英語は、国際経済都市としての発展のためというビジネス的な側面と、国民の一体性を高めるための共通語としての統合政策として設定された。同時に各民族のアイデンティティを尊重するため、1960年代からは学校教育において、小学校1年時から英語と各民族の母語を学ばせるバイリンガル政策を推し進め、1997

年からは愛国心を育むための国民教育も導入している。現在、国民の英語リテラシーは8割、2言語以上の言語リテラシーを備えたシンガポール人の割合は7割を超えている。

4. シンガポールの政策と民族の融和

4.1 言語政策と民族の融和

シンガポールは、言語教育政策と共に、言語運動を実施してきた。1979年から中華系民族の共通語を華語として民族の社会的統合を図ることを主要な目的に「Speak Mandarin Movement(以下「華語を話そう運動」)」が展開されている。その結果、中国語方言が減少しマーケットなどで華語が使われるようになってきているが、この運動が各民族グループのエスニック・アイデンティティの一つである方言を駆逐している、として反対意見も多く出ている。同時に英語が現地化することで浸透してきた「シングリッシュ」と呼ばれるシンガポール特有の英語を問題視した政府は、2000年から「Speak Good English Movement(以下「正しい英語を話そう運動」)」を開始している。経済政策面から見て、国際経済都市として好ましくないとの考えから始まったのが同運動である。これは、全国民が正しい英語を話すことで、国民の統合を進める一方、逆にシングリッシュを正すことで、シンガポール人としてのナショナル・アイデンティティを損なう恐れがあるという意見もある。

4.2 公営住宅(以下「HDB住宅」と)と民族の融和

1947年のイギリスの住宅委員会の報告書では、世界で最悪なスラム街「文明社会にとっての屈辱」の一つがシンガポールであり、建物一軒当たりの人口密度は18.2人である」と記されている。シンガポールは、1959年に自治権を得た直後に住宅不足に直面し、できるだけ多くの低コスト住宅を建設することが最優先課題と定め、住宅開発庁(以下「HDB」)の五か年計画が始動した。1966年時点で30万人が郊外のスコッター(破棄された建物や土地に不法)に住み、25万人が中心地区のスラム化した、狭い店舗の奥や2階に大勢で住んでいたとされている。最初の5年間で51,031戸の住居を建設し、1980年代には国民に住宅が行き渡り安定した住宅環境が整えられた。現在、シンガポールでは、国民の8割以上がHDB住宅に入居している。これは、独立当初の深刻な住宅不足を解消するための国策であったが、特定の民族が集住していた地区の解体も同時に進めた。住宅政策での大きな特徴は、HDB住宅の入居者の比率が一定の地域ごとに、国民全体の民族比率と同程度になるよう配慮され、一つの地域に一定の民族・言語・宗教の住民が集中しないように決められている。これにより、異なる民族・言語・宗教をバックグラウンドとする住民との関わりが生まれ、HDB住宅には、住民の交流を深める場として、ホーカーセンター(屋台村)や運動のための共用部分や開放空間も設置され、コミュニケーションの

ためにシングリッシュが進化し定着していった。

5. シンガポールの英語文学事情

5.1 シンガポール文学祭と書籍の出版

政府は経済発展を最優先としてきたが、1989年に芸術文化制度を作ることが提言され、1991年、国家芸術評議会が創立され膨大な予算が芸術分野に投入された。文化政策の一つである「創造産業育成政策」は、創造産業に従事する若者のために奨学金制度を作り、創造産業育成に取り組むというものである。この文化政策の中で、1986年にシンガポールの作家を世界に向けて発信する目的で、シンガポール文学祭は誕生し、その後も年一回開催されている。毎年その規模を拡大し、海外からの作家との交流やワークショップが充実し、作家の底辺を広げることに貢献したといえる。文学祭の期間中、作家向けにはどのようにクリエイティブな作品を生み出せば、商業的に成功するかを模索するワークショップ、一般向けには作家の講演など、多種多様なプログラムが組まれている。このような取り組みにより、シンガポールでは読書習慣が拡大され国内外の英語の書籍が読まれるようになり、シンガポールの地元作家による作品にも注目が集まっている。シンガポール国内に出版社は約75社（シンガポール出版協会調べ2016年）あり、特に地元作家の作品に注目した出版社もいくつかある。書店“Books Actually”を経営するケニー・レック氏は、2011年からは地元作家のための出版社“Math Paper Press”を立ち上げ、詩集、短編集、アートブックを中心に手掛け、後述の『バリッ・カンブン』も編集者のベレナ・テイの持ち込みにより、“Math Paper Press”から出版されている。

6. シンガポールで英語文学を書くことの意味

6.1 シンガポール標準英語とシングリッシュ

文学創作においては、地域性を強調し芸術的表現をするために、方言を取り入れることは珍しくない。英語圏でも、異なった地域で生活する民族が使う英語には、方言や言い回し、地域的、文化的要素が強含まれ、その表現をなくして創作は成り立たないであろう。シンガポール人は「標準英語」はオフィシャルな場で使い、「シングリッシュ」は生活の一部と捉え、コミュニケーションに不可欠な言語として浸透している。シンガポール英語文学の作品の中でも状況に合わせてこの二つの英語が使い分けられている。ここで、シングリッシュとは、どのような特徴を持つ英語なのかを簡単に説明することにする。

(1)発音の特徴

- i 単語の語尾の子音が発音されず、小さな「ッ」で終わり、Japaneseは「ジャパニッ」になる。
- ii 長音が省略され「park」は「パク」になる。
- iii 「th」が「t」や「d」に変化し「Think」は「ティンク」

になる。

(2)文法の特徴

- i 簡略化される傾向があり、be動詞、to不定詞、主語などが頻繁に省略され、「No need (いりません)」「can (できますよ)」「can? (いいですか?)」「Can, can! (いいですよ)」など、canを多用する。
- ii 動詞は現在形が基本で、「go yesterday」「go tomorrow」のように過去や未来のことは時間を表す言葉で表す。
- iii 語順が疑問文などで、文章の頭にある疑問詞が最後に置かれ「go where?」や「buy what?」になる。
- iv 名詞はすべて単数形で表し、複数形「s」も省略されることが多く「Three book」になる。

(3)単語の特徴（マレー語や中国語の方言の単語が混ざっている）

- i 文末の「lah」、文末に「lah (ラー)」をつけて「～だよ」や「～ね」といった意味として使われ「OK, lah! (大丈夫だよ)」や「Easy, lars (簡単だよね)」になる。
- ii 文末に「meh (マ)」をつけるだけで「～ですか?」という意味の疑問文になり「go there meh? (そこに行くのですか?)」や「like this meh? (これが好きですか?)」になる。
- iii 食べ物や物の名称がそのまま中国方言やマレー語のまま使われている。麺「ミー」、平麺「ミーポック」、コーヒー「コピ」、村「カンブン」などである。

7. 英語文学の中のシンガポール人の「サヤン」

7.1 ゴパール・バラタム短編集『いとしい人たち』

短編集には「インタビュー」「日暮れ酒」「婚礼の夜」「究極の商品」「ラブレター」「12月のバラ」「生きている記憶」「二重露出」「帰宅」「から元気」の10編が編集されている。著者のゴパール・バラタムは、インド系シンガポール人の作家であり、脳神経外科医としても著名だった。1935年に生まれ、シンガポールの植民地時代から独立するまでを経験し、独立国家になった1965年からはイギリスに留学し、1972年に外科医としてシンガポールに帰国した。その後、外科医、脳神経外科医として働くかたわら、1974年に短編小説「島」を出版し、その後も執筆活動を続け多くの作品を発表し、2002年4月23日に66歳で他界した。

7.2 短編集『いとしい人たち』からの考察

短編に登場する主人公たちの年齢や民族、生活環境はさまざまだが、人の力の及ばない出来事に対して感じる切ない心情を表している。「インタビュー」「生きている記憶」「から元気」に日本軍のシンガポール占領時代の経験、「日暮れ酒」はイギリスの植民地時代の残像を描き、「12月のバラ」と「帰宅」は、昔を振り返りその時々を追想する物語である。これら6つの物語に共通しているのは、現在から過去を振り返り、過去から現在へと繋げていく物語であ

る。「婚礼の夜」は主人公が好ましく思っていない親族の習慣が自分の中にも存在し、それが民族としての個性であること再認識する物語である。

短編集『いとしい人たち』には過去を振り返る物語が多く、「日暮れ酒」では、植民地支配が終わりゴム農場の新しいインド系農園主は使用人たちの生活や待遇の改善を試みるが、使用人に断られ気落ちしていた。すると、イギリス人の旧農場主夫婦がバルコニーで日暮れ酒を飲んでいる幻が見え新農場主は呟く、「イギリス人たちは去った。主人と奴隷の関係は終わった。土地は開発されるだろうが、ブライトン（イギリスの南海岸にある街）にいるどこかのご婦人のためではなく、この土地に住む男たち女たちのためなのだ」（p. 25）この一説からは、主人と使用人の関係が従来通りだとしても、この土地が自分たちのものになり、自分たちのために働くのだという思いが伺える。「インタビュー」では、日本軍占領下で捕虜になっていたイギリス軍の陸軍准将が、戦後生まれの青年から、日本人将校ヒロから受けた拷問について尋ねられ、「ほかの多くの日本人たちと同じように、ヒロは自分の義務と感ずることを、最善を尽くして果たしたのです」「考えてみれば、すでに敗北した国の一般市民の上に、一つならずふたつも原子爆弾を落とした我々の側のあの冷酷さに比べられるものではありません」（p. 19）と、戦争当時を振り返り語っている。「生きている記憶」では老人が古い時代に興味を持っている少年を自分の記憶の後継者に決め「ねえ、君、ここに来ると、過去が君に囁きかけるだろう？わたしにはね、過去がもう一度生き生きと蘇るんだ」（p. 114）、「もう怖いものは何もない。昨日のこのように思えるけれど、命が君の中へと流れ込むんだ」（p. 126）と、自分の思い出を、少年に語ることで、記憶を残そうとしていることが伺える。「十二月のぼら」では、発作の後遺症で喋れなくなり右半身が麻痺した老人が、力を振り絞って床を履って行き長持ちの蓋を開け中の品々から過去に思いを馳せ、「全生涯がよみがえってきた。すべてがそこにあった。母親が英国に行った折に送ってくれたラヴェンダーの香りとともに、つらくてしかもどこか甘美な喪失感が戻ってきた」（p. 108）からは、人生を振り返り幸せだった日々を懐かしんでいる様子を読み取ることができる。パラタムの「サヤン」は、「時は流れ、生命には限りがあり、変えることのできない運命のようなものがある」という定めを優しく見守る視線であろう。

7.3 アルフィアン・サアット短編集『サヤン、シンガポール』

短編集には「課題」「ビデオ」「孤児たち」「枕」「廊下」「対決」「勝者たち」「個室」「傘」「ブグス」「誕生日」「ディスコ」の、12の短編が編集されている。アルフィアン・サアットは、1977年生まれのイスラム教徒のマレー系シンガポール人である。シンガポール国立大学医学部へ入学し学生時代から演劇活動を行ない、2001年に短編小説集

『コリドー（廊下）』で、シンガポール文学賞を受賞し、現在も作家、詩人、劇作家として活躍している。

7.4 『サヤン、シンガポール』からの考察

短編に登場する主人公たちの民族、年齢は様々だが、大半がHDB住宅で暮らしているごく一般的なシンガポール人である。HDB住宅で起きた殺人事件から人と人のつながりに思いを巡らせる老女、父親の友人であるゲイの中年男性と関係を持った少年の失った時間とものへの郷愁、友人のボーイフレンドに思いを寄せ行き場のない気持ちを持って余している少女など、この物語の主人公たちは、こうありたい自分と、現実にはそうなれない自分の間に、〈やり切れなさ〉と、〈諦め〉、〈切なさ〉を抱えている。経済的に恵まれない、教育面で落ちこぼれている、愛している人に愛されない、不器用である、病気、孤独、そういった問題を抱え悩む人たちとその周辺の人たちの物語である。

「傘」では、主人公の落ちこぼれのマレー系少年が、裕福で優秀な中華系大学生の家庭教師クリスに憧れる物語である。大雨の日にクリスと気まぐれ別れた主人公が、数ヶ月後にクリスの忘れていった傘をさし、「僕はクリスのように歩きたかった。彼がしたように水溜りを飛び越えたかった。彼のように濡れずにいたかった。その雨の中で、僕はクリスだった」（p. 106）と思い、その直後に稲妻が走り、雷が鳴る中で「自分が誰であるか僕はわかっていた。その傘はクリスのものではなく、彼の手から僕に渡っただけのことだ」（p. 106）と考える。クリスのように在りたいと〈切望〉していた自分を諦め、現実の自分自身を受け入れ前に進むしかない〈哀しみ〉が感じられる。「勝者たち」では、失業中の夫と主人公に旅行が当選という電話がかかり、「八年間の結婚生活で、彼女が学んだことは、舞い上がったってかまわない、但しどちらかだけなら、ということだった。二人ともがそれをやると、失望の車輪が回り始めることになる」（p. 104）からは、主人公が何かを期待し夫と共有するたびに、裏切られてきたことが伺える。旅行の説明会に出かけ、オーストラリアの不動産投資を募るためだと知り、その夜家で夫は妻に対して心の中で詫げる「〈すまない〉という言葉の一つ一つが、いつか良い機会にシャーリーにやろうと取っておいた一輪の花から一枚一枚むしり取られた花びらのように感じられた」（p. 114）からは妻を喜ばせたいという〈想い〉と、できない〈哀しみ〉が伝わってくる。「個室」の主人公メイ・リンは同性愛者で、同性愛者のミッシェルを愛しているが、ミッシェルはアンジェラを愛し、アンジェラは男性のマイケルに夢中、という一方通行の恋愛の物語である。アンジェラからマイケルと一緒に旅行に行くと言われたミッシェルは、「だが彼女はまだ電話を切ることができなかった。その死を見届けなければならないのだ」（p. 137）と、諦めなくてはならないことを、頭ではわかっているが、心では行き場のない〈想い〉を抱え、メイ・リンを呼び出す。メイ・リンは自分が愛されていないことを感じ「彼女たちは、何の痕跡も

残さずお互いの体を通り過ぎていく訪問者に過ぎなかった。壁を通り抜ける幽霊みたいに、お互いを通り抜けていったのだ」(p. 143)と思う。これは『サヤン、シンガポール』の原題である『コリドー (廊下)』を思い出させる。廊下はシンガポールでは、一般的にHDB住宅の共用廊下を指し、貿易の中継地港として物、人、金を通り過ぎていくシンガポールをイメージさせる。サアットの「サヤン」はまだ廊下を通り過ぎることができず、たたずみながら、現在もしくは少し前の出来事を振り返り感じる〈後悔〉〈哀しみ〉〈切望〉〈愛〉であろう。

7.5 ゴパール・バラタムの「サヤン」とアルフィアン・サアットの「サヤン」について

ゴパール・バラタムとのアルフィアン・サアットの経験、バックグラウンドにも違いはあるが、最も大きな違いは、この2つの短編集の作品を書いたときの彼らの年齢ではないだろうか。『いとしい人たち』が出版される前年、夕食を共にした席で訳者の幸節氏がバラタムに厳格な菜食主義である理由を尋ねたところ、「それは僕が弱い人間だからだよ。あなたが僕ぐらいの年齢になったらわかるよ」(p. 222)と答えた。そのときバラタムは57歳ですでに息子をなくすという経験をしていた。一方、サアットは『コリドー』を発表した1999年には22歳だった。ゴパール・バラタムの「サヤン」には、過ぎた出来事や物、人、に対する「懐かしさ」といとしさ「愛」「哀しみ」「後悔」があり、アルフィアン・サアットの「サヤン」には、今、生きることから生まれる「想い」「愛」「哀しみ」「後悔」であり、誰もが生きていく日常生活で感じる切なさが書かれている。

7.6 短編集『バリッ・カンブン』と著者のノスタルジア

(1) ユーメイ・バラシン・ガムチョウ「灯台」

主人公インの両親は共稼ぎで平日はインの世話ができない。そのため、面識のないヨーク・リンおばさんのイーストコースト (東部の海岸沿いの地区) にあるHDB住宅で、おばさんの息子ジャスティンと三人で週末以外の時間を過ごすことになる。初日からインはHDB住宅の棟の最上階にある灯台に強い興味を持ち続け、灯台の光を眺めては中の様子を想像し暮らしていた。ある日、灯台の中を見たいという思いが抑えきれなくなり、灯台のある階まで行くが、灯台の中に入ることは出来ずおばさんの住宅に戻る。そこには、ジャスティンの父親が居て、インはおばさんの住宅を出て行かなくてはならなくなる。迎えに来た両親の車の中から、インは灯台の光が何度も回って来ては繰り返し照らし続けるのを見つめ続ける。

著者ユーメイ・バラシン・ガムチョウがシンガポールの灯台の存在を知るのは、1980年代に親戚の家を訪れたときだった。彼女はシンガポールのイーストコーストで10年、その中の2年をマリンパレード (東部と中央部にまた

がる地区) で過ごした。彼女は住んでいた当時の混雑した市場のリズム、細い路地、高層のHDB住宅に最も興味を惹かれていた。彼女は大人になった今、よくイーストコースト・パークをジョギングするが、灯台のある場所に立ち寄ることはなく遠くから眺めるだけにしている。

政府が1970年代にチャンギからカランまでの海岸沖を開発し、シンガポール最大の海岸公園イーストコースト・パークをオープンした。今も整備と再開発が続けられ、白い砂浜や広大な緑地、サイクリングロードやジョギングコースが整備されている。19世紀後半から営業していた「セライ市場」も、2016年には改築され、「セライ新市場」になり、明るく清潔な市場へと変わった。

(2) ヤェオ・カイ・チャイ「タハール」

国立博物館に侵入者が現れたことで、退職前の館長である主人公が忘れていた過去と対峙する物語である。子ども時代の親友のタハールと毎日自然の中で遊んだ大好きだったチャンギ・ビレッジ (北東端にある村)、自分のせいで下水管の中に消えてしまったタハールと猿を思い出す。侵入者を捕まえようと潜んでいた深夜の国立博物館で彼は過去の亡霊と対峙し、心の中にあった取り返しのつかない後悔とタハールと過ごした時間への郷愁に気づく。

著者ヤェオ・カイ・チャイは1970年代に生まれ、10歳までを牧歌的なチャンギ・ビレッジで過ごし、開かれた広場や雨水排水管を探検し成長した。「タハール」は、過去と現在が交差し忘れたはずの過去の秘密を思い出す物語であり、物語の題名は当時の彼の親友の名前タハールである。チャンギは1981年に国際空港が開港しめざましく発展し、綺麗で瀟洒なコンドミニアム、巨大なショッピングモールが建ち並び、牧歌的風景は消えている。

(3) ヨン・シュ・ホーン「大絶滅」

ジョギング中に突然亡くなった主人公は、状況が理解できずに意識だけが死体から離れ家に戻り、自分の死因を探ろうとする。過去にレイプ殺人事件があった道で亡くなったことから、自分の死をドラマチックなものだと思っていた。しかし、死が交通事故よるものだったと知り気落ちし、生前のボーイフレンドとの出来事や些細な事を思い出し家の中を漂っていた。その後、彼女の死に対する家族の悲しみや、母親が生前の主人公の日記を読もうとしているのを知り次第に耐えられなくなり、次の世界に行くために家を出て、解体が決まっているマレーシア鉄道 (1932年に営業開始し、2011年6月30日に営業を終了した) のレールを使い死後の世界に移動する。

著者ヨン・シュ・ホーンの実家は、ホーランド・ロード (市街地中心区) 近くの高級住宅地域にある。短編に出てくるジョギング・ルートは、彼が住んでいた当時の生活圏内とその近辺の道路で構成されている。彼がジョギングやドライブで親しんだ道は、1985年に短期大学生の未解決レイプ殺人事件のあった犯行現場であり、2階の彼の寝室からは、マレーシア鉄道の電車が地響きを立てて通り過ぎて行くのが聞こえていた。彼はこの物語を書くことで、

10代、20代に慣れ親しんだ場所と30代で住み始めた今の住居を結びつけることが出来たようだ。

(4) グー・リ・スイ「祖父の水族館」

物語は主人公の祖母が亡くなったという電話から始まる。生前の祖母と大勢の親類が住んでいたニースーン村の古い祖母の家に、主人公は子どもの頃にたびたび訪れていた。当時の彼にとって、祖母の家の裏は神秘的で魅力的な洞窟のような場所だった。そこにはいくつもの水槽があり、彼は「祖父の水族館」と命名し、シンガポールに来た当時の祖父を想像しては楽しんでた。祖母の死から、ニースーンの大勢の親類の住んでいた祖母の家や祖父の水族館、穏やかで優しく祖母を思い出し懐かしむ物語だ。

著者グー・リ・スイは、今までの人生をトア・パヨのHDB住宅に住み、思い出の場所は母方の祖父母が住んでいたニースーン村だけだ。「ニースーン」は開発によって消え「イシュン」(北に位置し1981年にHDBの最初のプロジェクトが完成した街である。)という街になった。村で暮らしていた人たちの絆も、今は人々の記憶の中にしか残っていない。この物語は著者の自伝であり、母方の祖父母、そして村に住んでいた親類たちの生き方、そして彼らが、著者の存在に与えた影響に敬意を表して書いたものだ。

(5) ドラ・タン「レッドヒルの七つの眺め」

母親と6人の兄弟姉妹が、それぞれにレッドヒル(中心地区)のHDB住宅での思い出を語る物語である。

スラム出身の母親にとっては文化的な住宅であり、自分も若く子どもたちは幼く、隣人たちは親密な関係を持ち、人生で一番楽しい時期を過ごした懐かしい場所。

1番目の子長男ペンにとっては、国の官僚養成奨学金を得て英国に留学できる、という手紙を受け取った輝かしい場所だった。しかし、留学から戻ると、家は引っ越し友達も皆いなくなり、慣れ親しんでいたものは全て消え去っていた。ペンは留学前の人で溢れ賑やかだった頃を懐かしく感じている。

2番目の子次男ヤンは、学校では落ちこぼれ、教師や母親にバカ呼ばわりされている。兄弟が多く貧しく十分に食べることもできず、着るものもお古ばかり。彼にとっては、毎日の単調な生活にうんざりし、ここではない場所やリュウガン(果物)の缶詰を腹一杯食べる生活を夢想していた場所だった。

3番目の子長女インにとっては、全てが筒抜けでプライバシーのかけらもなく、大声でののしり合い喧嘩ばかりしている両親、狭くて寝る場所もない生活にうんざりし、怠惰な母親への罵りの言葉を飲み込んで過ごしていた場所だった。

4人目の子次女レンにとっては、誰もが貧しく、貧しいことを気かけずに生活できるが、時間だけが有り余る程あり、想像上の親友ルルと誰からも見えない排水路の中を家だと想像し、おしゃべりやおままごとをして遊ぶことで過ごした場所だった。

5人目の子3女フィにとっては、3歳から5歳までは同

じHDB住宅に住む家族に里子に出され、毎日里親の子どもたちと住宅内を探検し、5歳からは自分の家族の住宅に戻り、ペンにチェスや切手収集の仕方、アトラスでいろいろな国のことを教えてもらい、夜はペンが奏でるハーモニカで眠った幸せな場所だった。

6人目の末子4女のシュウは、レッドヒルは何もかもが古く垢じみ、くたびれ、住んでいることさえ恥ずかしく思っていたが、同じ住宅に住んでいる親友たちと4人で、夜明け前の涼しい空気の中、棟の後ろにあった運動場でボールやフリスビーで遊んだ時間は最高の思い出だった。

著者ドラ・タンは、6人兄弟姉妹の一人として、レッドヒル・クローズのHDB住宅に生まれ、15歳までそこに住んでいた。彼女の夢は、リュウガンの缶詰を望むだけ手に入れることだという。今、彼女は十分な缶詰を手に入れ食料貯蔵室に溜め込んでいるが、缶詰を開けることができないままだという。

(6) ウォン・シュ・ユン「始まり」

フィリピン人メイド(住み込みの家政婦)のルアルハティは子どもたちの教育費のため、家族と離れシンガポールのチャンギの家で働いている。自分の娘と同じ年で容姿も性格も娘と類似点が多い雇用主夫婦の一人娘アメリカを自分の娘のように思い、世話をし楽しく過ごしていた。しかし、アメリカは大学入学と同時に多忙になり入寮し、家からいなくなる。ルアルハティは寂しく働くにことに意味が見出せなくなり、9年間暮らした家を去り帰国する。7年後に、アメリカに招待されチャンギに戻ったルアルハティは、街の何もかもが変わっていることに驚く。結婚が決まり新居も購入したアメリカに、今度は自分の新居の世話をしてくれないかと頼まれ、ルアルハティは初めてこの家に来た時の14歳のアメリカの笑顔を見出し、そして働くことに楽しみを見出したときのことを懐かしく思い出す。

著者ウォン・シュ・ユンは1986年に生まれ、1999年から今日までチャンギに住んでいる。彼女は風が吹いて自転車に優しいサイクリングロード、おびただしい数のレストランがあるシンガポールの東部での生活を楽しんでいる。チャンギでときどき飛んでいく飛行機を見ては、次の旅行について夢見ている。

(7) ローズマリー・ソマヤ「その花の木」

自然の木や土や風を愛する主人公は、ある日大切に思っていた花の木が政府により突然切り倒され、何もかもが管理されている政府の緑化政策(緑を増やし適切に維持していくため細かなルールが定められ、違反した場合には罰則、罰金が課せられる)に対して憤りを感じる。その緑化政策の波は、彼女のアパートの敷地や、住んでいる地域にまで押し寄せ、彼女を居心地悪くさせ始めている。アパートの価格が上がっていることもあり、新しいマンションに住み変えることに決めようとしていたが、亡くなった母親の家で、母親から主人公に残した手紙を読み、まだ今のアパートに住み続けることにする。

著者ローズマリー・ソマヤは、1982年に扶養配偶者と

してインドからシンガポールに来て、10年前にシンガポール市民になった。シンガポールでの最初の数年間には、何度も引越しを繰り返し、彼女の子どもが小学生の時に、ブラデルロード（北部地区の広大な自然公園近く）の家で住み始めた。彼女がブラデルロードを選んだのは、子どもたちが、自然とつながりを持って成長し、それによって、世界中の家族と繋がることのできるからだと言う。彼女は土の上に足を踏み入れるのが好きで、自然豊かな緑に溢れた生活を愛している。

(8) ベレナ・テイ「花の道」

高齢の主人公は認知症の妻と、階段があり雨漏りのする家で暮らすことが難しくなり、家売って便利のいい5LDKのHDB住宅に移り住むことに決める。多くの購入希望者が主人公の家に押し寄せ、中には傍若無人な家族もいる。今は荒れ放題になっている庭は、妻が若く子どもたちが幼かった頃に、妻が丹精込めて手入れをし、蘭やさまざまな花であふれていた庭だ。主人公の人生で最も幸せな思い出のある庭を残してくれるものと信じ、若い家族に安い価格で家売るのだが、庭は跡形も無く変えられてしまう。

著者ベレナ・テイはこの短編集の編者でもあり、1968年から1996年までを、ゴールドヒル・ガーデン（中央地域の高級住宅街）で過ごして、1996年、彼女の父親が癌で亡くなった後、家を売却したときのことを半自伝的な物語として書いている。

7.8 短編集『バリッ・カンブン』のサヤン

「バリッ・カンブン」の意味は、マレー語で「故郷の村に帰ろう」である。短編集『バリッ・カンブン』の異なる著者による8つの短編から「サヤン」を考察する前に、近い意味を持つ「ノスタルジア(nostalgia)」という言葉について考えてみることにする。語源はギリシャ語の「nostos(家へ帰る)」と「algia(苦痛)」に由来しており、「故郷へ帰りたいと切なく思い焦がれる」という意味だが、現在では「故郷や過ぎ去った昔を懐かしむ気持ち」と訳される。「短編集『バリッ・カンブン』の「村(故郷)に帰ろう」とほぼ同じ意味であることからこの短編集の「サヤン」は「ノスタルジア」と関係があると考えられる。

『バリッ・カンブン』の編者ベレナ・テイは編者前書きの中で、「この本に登場する8人の著者たちの記憶の奥にある思い出の場所、建物、そして物のほとんどがすでに存在していない。全ての物語があなたに、シンガポールの特定の場所や時間、物、人への郷愁を呼び覚ませ、ほんの少し切なさを感じさせるだろう」と述べている。1965年の独立以来、シンガポールはめまぐるしく発展し、その陰で多くのものが破壊され消えた。今もそれは繰り返され数年で風景が一変してしまうこの国では、慣れ親しんだ場所や風景、物が消え、欠落感や喪失感を感じることも少なくないだろう。最近、政府は新しいものを作るだけでなく、歴史的建造物などを残していこうという姿勢に変わったが、すでに破壊されてしまった懐かしい場所、物、風景

は人の記憶の中にしか残っていない。消えてしまったものに対する懐かしい気持ちを「ノスタルジア」そして、変化し続けるものに対する優しく切ない気持ちが『バリッ・カンブン』の「サヤン」だと言えるのではないだろうか。

8. 結び

8.1 シンガポールのナショナル・アイデンティティとシングリッシュ

「祖父の水族館」の著者であるグー・リ・スイは2016年5月14日のニューヨークタイムズでシングリッシュについて、「シングリッシュは機敏で、実用的かつダイナミック、話すみんなで形作っていく言葉だ」「国がより純粋なバイリンガル政策を推進するほど、国の多くの地域で、さまざまな言語・方言はシングリッシュの中で混じり合っていた」と述べている。三つの短編集では、シンガポール標準英語とともに、シングリッシュが会話の中や心の中で呟く場面で多く用いられている。シンガポール人たちに「シングリッシュに文法はあるのか」「シングリッシュはシンガポール人のナショナル・アイデンティティなのか」という質問をしたところ、「自然に出てくる言葉で、文法を考えたことはない」「どこの国にいても、シングリッシュを話している人を見るとシンガポール人だと思い、懐かしくなる」との回答を得た。現在のシンガポールにおけるナショナル・アイデンティティは、シングリッシュと密接な関係にあると考えられる。

8.2 シンガポール文学の「サヤン」

シンガポール英語文学の注目すべき特徴は、どの民族に対しても平等な視線で書かれていることだろう。自分とは異なる民族、宗教、風習、言語やさまざまなものを、容認し、受け入れ、理解しようとする優しい視線である。シンガポール文学における「サヤン」は、移ろいゆくもの、心の弱さ、さまざまなものを受け入れ容認する優しさ、「移ろいゆくものに抱く慈愛」と言えるだろう。それは、シンガポールが世界にもあまり例を見ない、移民から始まった多民族国家であり、異なる民族を思いやりながら共存することで一つの国になりナショナル・アイデンティティを持つに至ったからであると考えられる。

謝 辞

本論文の作成にあたり、終始適切な助言を賜り、調査のあり方や考察の方法など、細部にわたるご指導をいただいた放送大学の宮本陽一郎教授に、心から感謝いたします。放送大学 大学院の宮本ゼミのメンバー、ならびに牛山泰博氏には常に刺激的な議論を頂き、精神的にも支えていただいたことに心から感謝いたします。そして、本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いた、シンガポール人の皆様にも心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

参考文献

- アルフィアン・サアット著/幸節みゆき訳, “サヤン・シンガポール”, 段々社出版, 2015.
- 岩崎育夫著, “物語シンガポールの歴史”, 中央公論出版, 2013.
- 糸林誉史著, “シンガポール多文化社会を目指す都市国家” 三修社出版, 2000.
- 宇戸清治, “川口健一編,” 東南アジア文学への招待”, 段々社出版, 2001.
- 太田泰彦著, “プラナカン”, 日本経済新聞出版社出版, 2018.
- 大原始子著, “シンガポールの言語と社会”, 三元社出版, 1997.
- ゴーパール・バラタム著/幸節みゆき訳, “いとしい人たち”, 段々社, 1993.
- 田村慶子編, “シンガポールを知るための65章”, 明石書店, 2013.
- 田村慶子編著, “マラッカ海峡—シンガポール, マレーシア, インドネシアの国境を行く”, 国境地域研究センター出版, 2018.
- 鍋倉聰著, “シンガポール「多人種主義」の社会—団地社会のエスニシティ—”, 世界思想社出版, 2011.
- 林博史, “裁かれた戦争犯罪 イギリスの対日戦犯裁判”, 岩波書店出版, 1998.
- 林博史著, “シンガポール華僑粛清”, 高文研出版, 2007.
- 村都著, “シンガポールにおける国民統合”, 法律化社出版, 2009.
- リー・クアンユー著/小牧利寿訳, “リー・クアンユー回顧録(上)(下) ザ・シンガポールストーリー”, 日本経済新聞出版, 2000.
- 山田洋, “共通語とナショナル・アイデンティティ—シンガポールの言語政策をめぐる考察”, 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要学会誌, No.11, 369-381. 2010
- “シンガポールの英語「シングリッシュ (Singlish)」” <https://www.rarejob.com/englishlab/column/20190422/> (2019年12月参照)
- “シンガポールの歴史”, 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 <https://ja.wikipedia.org/wiki/> (2019年11月参照)
- Alfian Saat, “Corridor:12 Short Stories”, Silver fish News 出版, 1999.
- Edited by Verena Tay, “BALIK KANPUNG”, Math Paper Press出版, 2015.
- Gopal Baratham, “Sayan”, Marshall Cavendish International出版, 1991.
- Gopal Baratham, “Collected Short Stries” Marshall Cavendish International出版, 2014。
- Yu-Mei Balasingamchow, “Singapore: A Biography” National Museum of Singapore出版, 2009.
- “Central Singapore Community Development Council Annual Report FY 2012/13” 報告書, 2013.
- HDB Quality Living - Sample Housing Survey “Public Housing - A Singapore Icon” . 2017/6/5,報告書, 2013
- “North East Community Development Council Annual Report 12/13” ,報告書, 2013
- “North West Community Development Council Annual Report FY 2012” 39, 報告書, 2013.
- “People’s Association Annual Report FY2012”, 報告書, 2013
- Turnbull.C.M. “A History of Modern Singapore:1819-1988” “Population Trends 2014”, Department of Statistics Singapore報告書, 2014.